

18世紀メソディズムの『自由の概念』について

野村 誠

問題の所在

中世共同体社会を解体し、近代社会を形成した要因について、ドイツの神学者・思想史家エルンスト・トレルチはルネッサンスよりも宗教改革の方が重要な働きをなしたと述べている。トレルチは中世カトリック教会の教皇支配による **Corpus Christianum** (キリスト教共同体社会) から、近代世界を形成していったのは宗教改革でありプロテスタンティズムであるとみなし『プロテスタンティズムと近代世界 1』¹を著している。その中で中世共同体社会を解体し、それを克服したのは個人の自律独立であり、これを導いたのは神と個人の信仰に基づく契約関係という宗教改革のプロテスタンティズムの一連の流れであると論じている。

ここで重要なことは彼がこの書物の中でメソディズムを近代化と個人主義を形成することに貢献した宗教運動として取上げていることである。トレルチは、メソディズムを「近代の精神的展開において最も重要なことの一つであり、全く個人主義的に強調された形における、正統的キリスト教の再生」と主張している²。そこでトレルチの論説を紹介したい。

¹ 『トレルチ著作集』8・9巻 ヨルダン社 1984・1985年

² 『トレルチ著作集』9: 49-53

そもそもメソディスト派は、中流および下層階級において、つまり炭鉱地帯や工業都市の労働者たちにおいて勝利を勝ち得たものである。メソディズムは彼らに精神的・人格性の高揚をもたらし、彼らとわかりやすい大衆的想像力に訴え、非常なる自己犠牲を覚悟で、愛の奉仕活動を行なった。……メソディズムは、無力な、まさに工業化によっておちぶれた大衆の中にある人格性と個人性への欲求を導き、慈善活動によって彼らを困窮から助け出した（『トレルチ著作集』9: 53）

メソディストとなった人々は、英国国教会の牧会と配慮の及ばないところに位置していた下層大衆であった。メソディズムが受容された地域は、北部、中部の地方工業地域で、「浅慮」「信頼不能」「不注意」と言われた人々であった。その人々がウェスレーの伝道によって変えられ、「堅実」「節制」「勤勉」等の諸徳性によって社会的にも信用され良き市民となっていった。

しかし、このトレルチの主張するメソディズム理解「近代化と個人主義を形成することに貢献した宗教運動」のなかで個人の自律独立を導いた神と人との契約の場は十分考察されていない。ウェスレーは神と人との契約の場を個人の良心と見なし良心の自由な働きを尊重することを唱えた。かくして個人の自由の概念は宗教的自由から世俗的な領域にまで広がり、個人の権利が確立していったのである。

現代ドイツ神学者、J.モルトマンも『いのちの御霊』で「17-18世紀の信仰覚醒運動において、この信仰における自由の個人的次元が発見され強調された。」³と述べ、メソディズムを含むプロテスタント諸派により信仰の自由から社会的自由が拡大しており、「宗教の自由」なしに「自由な社会」は決して存在しないと論じている。「信仰の自由と自己の生命に対する個人的責任は、プロテスタンティズムを通じて近代世界に入って来たのである。」⁴と述べている。自由の概念の広がりによって抑圧されていた人々のエネルギーが解放され、それがメソディズムの力の原動力となり近代市民社会のエートスとなっ

³ J.モルトマン、蓮見和男・沖野政弘訳、『いのちの御霊』新教出版社 1989年、174-175頁

⁴ 同 75頁

たと考えるのである。

ウェスレー・メソディズムには保守的で権威主義の面があるが、その一方で個人の自由意志を重んじる面がある。H.J. Mullerは *Freedom in the Western World* でメソディズムを英国啓蒙主義時代においてもっとも刺激的動きであった⁵と述べているが、とくにウェスレーの人間理解が楽観的で人間性を信頼するところにあることを指摘している⁶。そこで18世紀ウェスレー・メソディズムにおける「自由の概念」について取り上げたい。

ウェスレーは自由意志論を唱え「先行の恩恵」(preventing/prevenient grace)により人間には「自然の良心」(natural conscience)与えられており救済への選択の自由を人は所有していると主張した。この自由の概念を考察したい。そこでウェスレーの「自由の概念」をA自由意志、B良心(自由に働くためには自由こそ尊重されねばならない)、そして世俗の領域とも重なるC人間の基本的権利としての自由、の三つに分けて考察したい。

A. 自由意志

英国人にとって自由を守ろうとするのはマグナ・カルタ以来の伝統であるが、18世紀英国において、特に個人の自由の強調は時代の潮流の一つであり、J.ロック、D.ヒューム、J.ルソー等の影響により個人の自由の思潮が、経済社会倫理思想と結びついていた。そのなかでも非国教徒は、新しい市民社会倫理形成のエートスの担い手となっていた⁷。

⁵ H.J. Muller, *Freedom in the Western World*, (New York: Harper & Row, 1964), p. 322.

⁶ *Ibid.*, p. 33.

⁷ G.WEヘーゲルは『歴史哲学講義』長谷川宏訳 岩波文庫 2001年で歴史の中で発展した自由の概念について展開している。『歴史哲学講義下』p. 321でイギリス人はとくに自由の感情が強いことを指摘している。英国人にとっては自由を守ろうとするのはマグナ・カルタ以来の伝統であると理解している。マグナ・カルタは君主に対する貴族の自由にはかならなかった。p. 334 しかし、一方で「現実の自由の制度という点から見て、イギリスほどそれが行きとどかぬ国はない、個人の権利や財産の自由にかんして、イギリスは信じられないほど遅れています。」p. 370と批判。
L.スィープンソン 中野好之訳『十八世紀イギリス思想史』上中下巻 筑摩書房 1985

ウェスレーは、自由を神の救いへの応答の自由とした。このことに着目したい。プロテスタント神学では人は原罪によって自由意志を失っていると考えているが、ウェスレーは「先行の恩恵」により人には自由意志が少し与えられていると主張する⁸。この自由意志の概念が、ウェスレーの救済論をカルヴァンの二重予定説から区別させる重要概念で、自由意志がすべての人に与えられていることは、救いの門がすべての入りに開かれているということなのである。

神はすべての人が教われることを望んでおられるが、しかも、彼らを強制してまで救おうとはされない。……人間として、すなわち、何が善であるかを識別する理解力を持ち、また、それを受け入れたり拒否したりする自由をもつ理性的な被造物として、神は人間を救おうとされるのである。(野呂芳男・藤井孝夫訳『ウェスレー著作集』7: 131 新教出版社 1973年)

人間は理解力 判断力 良心、そして理性と自由意志を持ち、人は救いを受け入れたり拒否したりすることができる存在としてウェスレーは理解した。ウェスレーにおいて人間は「先行の恩恵」により、ある程度の自由意志と良心、認識力が与えられており、罪に傾く傾向はあるがアルミニアニズム的自由意志による救済への選択の決断が出来ると考えられている。それゆえ、良心の働き、認識力により自由な中で人は神との救いの契約を結ぶ能力があるのである。H・リントシュトレームは、ウェスレー神学で「人間に与えられている自由は、恵みに基礎づけられている自由である。神は自由に行動する存在としての人間を救い出す」⁹と述べる。神の恵みは不可抗(irresistible)ではない。人間は自由な中で神への救いを選ぶというのである。人間は自由に神の恵みに応ずることもできるし拒否することもできる。このような状況の

年。J.C. Warner. *Wesleyan Movement in the Industrial Revolution*, (New York: Russell & Russell, 1967), pp. 25-26.

⁸ 『ウェスレー著作集』新教出版社 1973年、7: 124

⁹ H.リントシュトレーム 野呂芳男訳『ウェスレーと聖化』新教出版 1989、68頁

中で、人間は救済を選択し、神との契約を結び神の祝福を受けることができるのである。契約について考える場合、契約する当事者の人間に意志や主体的責任能力を認めないならば神と人間との契約について論を進めることができないのである。人間の主体性を認めている。

良心の働きの尊重は、メソディズムをして個人の救済をみさず敬虔主義的な内面の宗教へ方向づけている。そこでウェスレーの救済の基本となっている「良心」に着目してみよう。

B. 良心

ウェスレーは「我々自身の救いを全うすることについて」¹⁰ (**On Working out our own Salvation**) という説教で「先行の恩恵」と良心について取り上げている。良心は異教徒を含め全ての人に神から「先行の恩恵」として与えられている。

誰も、自然の良心と漠然と呼ばれているものを全く欠いて生きている人はいない。しかし、これは自然のものではなくもっと適切に言えば「先行の恩恵」である。(Wesley, Works 6 : 512)

ウェスレーは、「良心について」¹¹説教をしているので、その論旨をまとめてみたい。「自然の良心」(natural conscience) はすべての人々に「神の自然の賜物」として与えられており¹²、すべての人を照らす真理の光であり、御子イエスに基づく神からの賜物である。良心は、「神の超自然の賜物であり、自然の付与以上のものである」、良心は、御子イエスに基づく神からの賜物であり、すべての人に見出され、すべての人を照らす真理の光である。それゆえ、ウェスレーにおいて良心は、救済の場であり、良心とそれに基づく行為が重視される傾向が濃くなっている。しかし、ウェスレーの「良心」の定義

¹⁰ Wesley, Works 6 : 506–513.

¹¹ Works 7 : 186–194.

¹² Works 7 : 187.

は、理性や知性、判断力や意志、感受性をも含んだ、広い役割を意味している。良心の重視は、メソディズムを個的、内面的宗教へと方向づけ、個人の自由そして結果責任を重視していると言える。良心は自由に働くゆえにウェスレーは自由を尊重した。そこで世俗の領域とも重なる人間の基本的権利としての自由について考察したい。

C. 人間の基本的権利としての自由

ウェスレーを時代との関係でとらえるため、ここで18世紀イギリスの思潮について短く述べよう。当時の英国は産業革命時代、啓蒙主義時代で、ロックやヒュームの思想、個人主義、理性主義、そしてルソーによる個人の自由の思想があった。特にロックによる個人の経済的自由な活動の思想は、市民的自由の根源であった。そして新しい経済思想は、経済的機会(チャンス)の平等の原理を唱えた。その中で個人の能力の自由な働きが個人と社会にとって十分な利益をもたらすと信じられていた。W. J. ウォーナー (Warner) は、「個人の経済的自由が、市民の自由の根源であった。」¹³と述べている。そして、「経済的自由主義は、政治的自由の力であった¹⁴、さらに、この自由は宗教的な自由とも結びついており、非国教徒の宗教運動と結びついていた。ウォーナーやヘーゲルも英国には自由を尊重する土壌があった¹⁵と論じている。

ウェスレーは、「Thoughts upon Slavery」¹⁶の中で、奴隷制の下で生きるのは自由の否定であり、非人間化であり、人間としての権利を奪われていると批判して、奴隷制度を否定し英国奴隷解放に貢献した。ウェスレーは、自由を自然法に基礎づけ、人間の基本的権利としての自由を主張している。

人が空気を呼吸するやいなや自由は、すべての人の権利である。そし

¹³ W.J. Warner, *The Wesleyan Movement in the Industrial Revolution*, (New York: Russell & Russell, 1967), *ibid.* p. 26.

¹⁴ *Ibid.*, p. 28.

¹⁵ *Ibid.*, p. 4.

¹⁶ Works 11: 59–79.

て、どのような法も、自然法による自由の権利を人から奪うことはできない。(Works 11:79)

人間は本質的に自由を求める存在であり、人間の自由を抑圧する制度や教理に彼は反対し奴隷制に反対したのである。さらに基本的な人間の権利である自由は理性に基づいていることを彼は次のように論じている。

世界のすべての人が、自由を求めている。呼吸する者は誰でも、教育や芸術に先立つ自然本能の一種によって自由を呼吸する。また同時に、すべての人の理解力には、理性的本能 (a rational instinct) としての自由がある。われわれは、われわれの理性に反するのではなく、われわれの理性の結果として自由を渴望することを感じる。

(Works 11:34, Thoughts upon Liberty. 私訳)

引用のように彼は、「すべての人の理解力には、理性的本能として自由がある」、それゆえ「理性の結果として自由を渴望する」と主張している。人間の自由は神から与えられたものであり、理性の結果としても自由を求める。特に宗教的自由は、我々の良心に基づき、自由に宗教を選択する最も重要な権利と唱えている¹⁷。しかるに良心は、自由と理性の下で機能し、自由のないところでは良心は働かないことは明らかである¹⁸。J.C. ローガン (Logan) も、「神学的にウェスレーは、人間の自由の信条を神に基づかせている。なぜなら神の基本的性質は自由な行動であるからで、被造物なる人間は同様の自由を附与された時、それが神の創造の冠であった」¹⁹と解説している。人間の自由と理性、そして良心の働きを主張していることは、人間に対して楽観的で信頼しており、プロテスタント神学の中でも、ウェスレーの待徴である。

ウェスレーも自由を強調し、自由な中での救いへの選択を唱えた。そして、

¹⁷ Works 11: 37.

¹⁸ Works 11: 90–93.

¹⁹ J.C. Logan, “Toward a Wesleyan Social Ethics” in Wesleyan Theology Today, ed. by T. Runyon, Nashville: Kingswood, 1985), p. 366.

自由な中での決断、選択というのは、道徳的責任を個人が問われるのである。さらに次のように自由について語っている。

一般に自由と呼ばれている人間の特性について、私は考察している。自由はしばしば意志と混同される。しかし自由と意志は全く異なるものである。しかも自由は意志の一つの働きではなく、心の固有の働きである。自由は心のすべての機能の上に働きかけることができるだけでなく、身体の運動についても同様である。自由とは自己を規定することのできる力である。(Works 7: 228. 清水光雄『ジョン・ウェスレーの宗教思想』1200 頁、清水訳参照)

ウェスレーは、自由と意志を分離させて理解している。そして、自由は心の固有な働きであり、引用のように「自己を規定することのできる力である」と教えている。ウェスレーは、人間精神の高貴さ尊厳を回復させ、会員に自己を自由に描いて飛躍の目標を与え、エネルギーを出させた。

確かに我々の自由はあらゆる思い、想像も支配できるほど自由ではないが、一般に我々の言葉、行動面では我々の自由は支配力を所有している。話したり話しをしなかったり、行動したりしなかったり、行動したり反対のことをしたりする点に関して、私は実に自由である。この自由であること確かさは、私の存在の確かさと同様である。(Works 7: 228)

初期メソジストは社会的下層の人々が多く差別や侮蔑により自己卑下し傷ついていた。それゆえ自己のイメージを作り出す精神の内面は絶対に自由でなければならなかった。そしてウェスレーは自由を唱え人々に尊厳を回復させ力を奮いたたせた。H.J.Muller は Freedom in the Western World で本当の自由のなかで人は真にその人自身となり、その人にとって正しく真実であるものを選びとることができると述べている²⁰。

²⁰ H.J. Muller, *ibid.*, p. xvi.

しかしウェスレーは、政治的には保守主義者であり、アメリカの英国支配からの独立の自由を反対した。ハイツェンレイターも指摘するように、1775年に「我がアメリカ植民地への冷静なる提言」(A Calm Address to Our American Colonies)を出版して米国独立に反対した²¹。英国共同体社会分裂への危機感を抱いた。一方個人の基本的自由については1772年の「自由についての諸考察」²² (Thoughts upon Liberty, Works 11:34–36)で個人の基本的自由を主張し「市民的自由、財産所有の自由」²³を彼は表明している。

私は私の選択により、あらゆる点で自由に生きる。私の人生、人格、財産は安全である。私は何人の楽しみのためにも殺されず、不具にされず、拷問を受けることはない。私は投獄されず、手錠をかけられない。
(Works 11 : 42)

またウェスレーの自由の中には、寛容があったことも加えておかねばならない。彼は、主イエス・キリストを信じるならば、その人の意見がどのようなものであろうと受け入れるべきことを述べている²⁴。ウェスレーはロックの市民的自由の思想を、新トーリーとして継承している。「彼らは他のいかなる国民にも知られていない、偉大なすばらしいものを現実に享受している。つまりそれは市民的自由、財産所有権の自由である」(civil liberty, a liberty of enjoying all our legal property)²⁵。ロックが統治の究極目標とした「所有権」の保全が名誉革命以降の英国の王制下において現実に実現し、それまでに体験したことのない宗教的、政治的自由を英国国民が享受し、世界の模範になっているとウェスレーは語る。現実として彼の政治思想とアルミ

²¹ Works 11: 80–90. Richard P. Heitzenrater, *Wesley and the People Called Methodist* (Nashville: Abingdon, 1995), pp.262–3. Some observations on Liberty. Works 11: 90–118.

²² Thoughts upon Liberty, Works 11: 34-36.

²³ Works 7: 403, 11: 42.

²⁴ 『著作集』4: 470.

²⁵ Works 7: 403. 清水 前掲、85頁

ニアニズムとは共存したのである²⁶。ウェスレーの政治理解は、彼のアルミアニズムの神学に由来するものである。

さらにウェスレーのキリスト教と社会の理念について探ってみよう。彼はキリスト教を個人の救済だけでなく共同体社会の救いの宗教と信じていた²⁷。したがって中世の有機的キリスト教共同体社会を、都市化と産業革命の進む中で新たな装いのもと再興しようとしたのである。彼は英国社会の問題を良く理解し、宗教復興によって様々の危機から英国を救おうと意図し、キリスト教道徳をその中心に位置づけたと言えよう。そのウェスレーの社会理念は、J.W. ブレーディ (Bready) の見解によれば「自由、平等、友愛」(Liberty, Equality, Fraternity)に要約されるフランス革命(1789年)より50年早いのである²⁸(Ibid., p.205)。ところがウェスレーは、この「自由、平等、友愛」を「神の国」(the Kingdom of God)の理念に位置づけたところが、フランス革命と異なっている²⁹。ウェスレーが提唱した自由は、イエス・キリストの復活の力による罪と死からの自由であり、平等に人は兄弟姉妹であり神の前では罪人であり、等しく神の恵みを必要としている、友愛について、父なる神の下での人種を越えた愛として教えたのである。ウェスレーは霊的な社会つまり「神の国」を理念とする共同体を描いていたのである。それは具体的にはウェスレーと年会を中心にしたコネクションナル・システムであり、個人の内面の回心に基づきメソディストたちは強力な組織に統合された宗教組織であった。個人の自由な神との契約に基づくキリスト教の共同体社会すなわちサクラメントを社会に拡大させたものであった。

結論

近代社会の成立は個人の自立独立であり、これを導いたのは神と個人の信仰に基づく契約関係という宗教改革によるプロテスタンティズム宗教思想で

²⁶ 清水 前掲、85頁

²⁷ 『著作集』4: 7–13

²⁸ J.W. Bready, *England: Before and After Wesley*, (London: Hodder & Stoughton, 1939), p. 205.

²⁹ Ibid., p. 205.

ある。メソディズムは近代化と個人主義を形成することに貢献した宗教である。個人の自立独立を導いた神と人との契約の場をウェスレーは、個人の良心とみなし良心の自由な働きを尊重することを唱えた。そのなかで人間の理性の役割を認めたことが重要である。

宗教的自由から世俗的な領域、市民的自由、思想、政治、経済の自由にまで個人の自由の権利の概念が広がっていったのである。フランス革命より半世紀も早く、この自由の概念によって抑圧されていた人々のエネルギーが開放されてメソディズムの力の原動力となり近代市民社会形成のエートスになったと結論付けるのである。

(共愛学園 前橋国際大学 助教授)